

島根の中山間地から Work as Life

第6回

幕を閉じる

野中 浩一

ものごとを閉じる

「閉じる」ことは難しい。思いきれないから難しいと思いついていてただけかもしれない。とにかく閉じるイメージを持つことは、何かを始めることやより良くすることに比べて、エネルギーの向けどころがわかりにくいと私は感じている。

今の家に16年住んでいる。わが娘2人が生まれ育った持ち家だ。田んぼに囲まれた農道沿いの平屋の一戸建て。景色も空気も居心地も良い。地域の方にもお世話になってきた。14年間可愛がってきた飼い猫も眠っている。しかし車がないと生活できず、最寄り駅やスーパー・コンビニ・病院まで歩いて30~40分かかる。およそ5年後、子どもたちが独立した後も住み続けるのか。それとも家を閉じるのか。果たしてそんなことが可能なのか。

28歳時から44歳になる現在までフリースクールを運営してきた。何事も生徒と一緒に考え、一緒に行っていくことを実践してきた。しかし近年は老眼と白内障治療の結果、勉強を教える際や小論文の添削をする際などに困ることが多い。普段使いの眼鏡ではまず文字が読めないという状態からスタートするため、教える瞬発力が著しく低下した。動体視力にも影響があり、高校生とキャッチボールしていると速い球がふと消える。眼だけでなく足首や腰の痛みがクセになっており、一緒にバドミントンやフットサルをしてきたが、対等にプレイできるとは言い難くなってきた。20代や30代の頃と比べて同じ質で生徒たちと関わり続けることが難しい中で、どこで何を転換するのか、いつどのようにスクールを閉じるのか。

ボリュームゾーンの老化

こう書くと中年男性が子育て後の人生（俗にいう第二の人生）や老化の悩みに直面して当惑し愚痴を言っているように感じられるかもしれない。確かにそうした側面もある。一方でこの事象を日本全体に拡大して考えた時、歴史上初めてとも言える少子高齢化の大波の中で、人口ボリュームが大きい40代～50代前半の団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニア世代の老化が社会の構造に及ぼす影響は少なくないように思う。

この世代と話をしていると、認知症の家族・介護が必要な家族を抱えながら仕事や生活を支えていること、家族の大病や死による家族資源の低下を抱えてそれでも日々が続くことなど、出口の見えない話を聞くことがしばしばある。こうした話自体は今に始まったことではなく多くの家庭が直面してきた困難であるが、これまでにない日本全体の高齢化の中、経年の変化によりじわじわと苦境に追い込まれている人の割合が次第に増加していることを感じている。

人生を閉じる

人生を閉じることもまた難しいなと感じる。ついこの間のこと。祖父、母、叔父、妻、娘2人と一緒に過ごすお盆。96歳になる私の祖父は、日頃お世話になっているデイサービス施設の事情により、しばらく通う場のない夏を過ごしていた。不意に「おらあ、いつ死んでもいいと思ってる。いつ死んでもいいと思っているようだけれども、それでも薬を飲んでるし、なにか調子が悪くなれば病院に行って見てもらってる。結局は死にたくないということだわなあ。だから薬も飲むし病院にも行く。」と笑う。

家族以外の誰かに対して、死にまつわる話しをする機会は少ない。私はそう感じている。私のはじめて死の輪郭を感じたのは4～5歳の頃だった。母の田舎に帰省した際、それまで元気だった大祖母が寝たきりになっていた。当時小さかった私は大祖母が臥せている部屋に行き、枕元で話をした。そのときの常夜灯の茶色く薄暗い光が記憶に焼きついている。ほどなくして大祖母は亡くなった。

それから40年。いくつかの印象的な死があった。10代のとき、私の友人と親しかった高

校の同級生がバイク事故で亡くなった。20代のとき、高校の友人が突然倒れて亡くなった。くも膜下出血だった。弔問のため自宅に伺い、お母さんの話を聞いたときの部屋の光景は今も鮮明だ。30代のとき、大学時代の部活の3つ下の後輩が急逝したと同じ部活の友人から聞き、同期で弔電を送った。40代では、高校の同級生と一緒に登下校し何度もカラオケに行った友人の訃報を聞き、1000km近く離れた地元に戻り、ひとり弔問した。誰もかれも予測した死でもなければ、思い描いていたような結末でもなかったであろう。

自分にかぎって死ぬことはありえない

「死とその過程」に関しての実践と研究を数多く残す精神科医エリザベス・キューブラー・ロス『私たちは無意識のうちに「自分にかぎって死ぬことは絶対にありえない」という基本認識をもっている』と述べている。そのため人はいよいよ自らの死が近づいていることが分かると、否認し、怒り、なんとかできないかともがく（もちろん人によって心境や過程に違いがある）。しかし、いよいよどうにもならず鬱鬱とした日々を過ごし、次第に死を受け入れていく。ロスは、多くの末期がん患者とのインタビューを経て『患者にとって死そのものは問題ではなく、死ぬことを恐れるのは、それに伴う絶望感や無力感、孤独感のためであるということがわかった』と考察している。

私が「死」の理解に前のめりになったのは昨年度のこと。コロナ禍の2年間で祖母、飼い猫、父が相次いで亡くなったことによる。とりわけ父の死によって、次は私の番だという自覚が急に高まった。『今まで死というものを考えたことがなかったのに、父親が死んだら、死と自分との間に父親が立ち塞がっていたのがわかった、死と自分が直面するようになった』との遠藤周作の著書にある記述は、今の私の感覚そのものだ。

前述のロスによれば、重大な疾患などで死に直面した際の絶望、無力、孤独を和らげるものがあると言う。自分に関心をもってくれる人と話し合えること、その人自身の必要感や困難感に寄り添う人がいること、（死にまつわる話題等について）遠回りな聞き方でなく素直に質問してくれる人がいること、自分に意味があり誰かの役に立つと思えること。そうした1つ1つが死の間際の絶望、無力、孤独を和らげてくれる。また、『ほとんどの患者が自分の不安を他のだれかと分かち合いたいと願っていて』『一人残らずいくばくかの希望を持ち続け、とりわけつらい時期の心の糧としていた』とも述べている。こうした疾患による絶望、

無力、孤独の緩和と、学校や職場や社会集団で適応できない（自分が自分でいられない）絶望、無力、孤独の緩和。状況は違えども、不登校やひきこもりで心身の状態が弱り切っている子どもたちと共通するものを感じる。

死ぬことの意味

そんなあれこれ、閉じることや死ぬことに思いを巡らせているとき、書店で平積みされている本の帯に目が留まった。そこには『私たちが死ななければならない「重要な意味」とは？』と書かれていた。生物学から見た死の仕組みが書かれた小林武彦著『生物はなぜ死ぬのか』。その理由はここでは割愛させていただくが、読み進める中で、やはりというか衝撃を受けた記述がある。生物学的には55歳くらいから『ゲノムの傷の蓄積量が限界値を超えはじめ』『異常な細胞の発生数が急増し』『そこからは病気との闘い』になるとのこと。つまり、多少の個人差はあれ、人の機能を維持する分岐点が55歳頃であるという。繁殖の時期を終えると死を迎える生き物が多い中、哺乳類は子どもが未熟な状態で生まれるため、子が育つ程度の年数を生かされているということだろうか。

生きること自体に意味があるわけではないと何かの本で読んだことがあるように記憶している。しかし人間は考える生き物であるから、生きることの意味を見出し発展の原動力としてきた。それと同じく意味を見出さずに死ぬことは難しいのかもしれない。歴史上では僧や武士や庶民や軍人が、飢饉や戦乱や病気や感染症など死に直面する中で、多様な死ぬ意味を見出し支えにしてきた。一例として『浄土へと往生するには、南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）と申すだけ。阿弥陀仏の願いを疑わずに念仏申す、その他には何もない』という法然思想がある。この思想的発明とこうした思想が普及するに至った苦難多き時代背景は興味深い。死に直面した人は、その絶望感、無力感、孤独感を受け入れて死に向かうために、分かち合える人、未来への希望、そして支えとなる意味を欲する。

ここまであれこれと書いて思うことは、成長や発展の上り坂は人の考えや意図が及ぶ余地があるが、老化や衰退の下り坂はただ世情の在り様に任せて（支えとなる杖を求めながら）転がり下るよりほかないのではないかということである。山本周五郎の小説「ながい坂」の登場人物たちの人生の浮き沈みがふと思い出される。閉じること、死ぬことも、考えてもどうしようもない。むしろその時が訪れたときに初めてどうなるかが分かるといった具合

なのかもしれない。私はカトリック系の幼稚園を卒業し、浄土真宗で葬儀を行い、地域の行事では神道のお祈りに頭を垂れるような、悪く言えば曖昧模糊とした無信仰者、良く言えば異種混合の宗教観を持つ雑学者である。これまで当たり前にかけていたことや享受してきたことが当たり前ではなくなる高齢化社会にあって、対人援助職者としての在処、衰退する中での希望、死ぬことの意味を模索している。他方、そんな個人の小さな感傷をよそに、世界の人口は増え続け、社会は絶えず揺れ続けている。

引用・参考文献

- E・キューブラー・ロス著，鈴木晶訳（2001）『死ぬ瞬間 死とその過程について』
中央公論新社
- 遠藤周作（1996）『死について考える』光文社
- 小林武彦（2021）『生物はなぜ死ぬのか』講談社
- ニュートン別冊（2019）『死とは何か 死ぬとき、私たちの体に何が起きているのか』
ニュートンプレス
- 釈徹宗（2011）『法然親鸞一遍』新潮社